

第 35 回 福島のパ染の村は「姥捨て山」

このほど、2011 年 4 月 22 日、3・11 の福島第一原発事故で、全村が「計画的避難区域」に設定された福島県飯館村の老人ホーム「社会福祉法人いいたて福祉会」を訪問しました。その悲惨極まりない現状を報告させていただきます。

飯館村ですが、そこは「日本で一番美しい村」と呼ばれ、NHK・BS が「世界で一番美しい村」として報道、イギリス観光旅行の人気スポットになっているコッツオールズの村々にも似た、とても美しい中山間地域の村です。東北では、奥羽山脈と違い、阿武隈山系はなだらかな丘陵地帯の広がった、「飯館牛」など牧畜に適した草地、そして田畑の広がる農村です。その農村に、1996 年に「いいたて福祉会」の老人ホームが設立されました。

老人ホーム設立に当たり、飯館村では元気な老人たちの活動の場としてホームを考えました。単なる介護の施設でなく、「老人力」が地域に生かされる場所としての老人ホームです。丁度その当時、仙台で NPO 法人「シニアネット仙台」の理事長として、「行くところがある、することがある、会う人がいる」を合言葉に、元気な老人活動の場づくりを始めていたので、飯館村からお声が掛かりました。沢山集まった関係者に仙台の経験を話し、「ぜひ飯館にも元気な老人ホームを作って欲しい」と訴えました。

そんな縁があり、設立された「いいたて福祉会」の成功を、心より期待していました。ところが 3・11 の原発事故、原発の立地もなく、協力交付金も一銭も貰っていないのに、風向きだけで飯館村全体が「計画的避難区域」に指定され、村民は全員避難、村役場も福島市内に移転しました。老人ホームの「概要」では、その時の避難対応について、こう説明しています。

(1) 避難する場合

県内外に分散する方法

県内外の仮設に避難する方法

これら避難して移転する方法は、適当な場所が見つからず断念。

(2) 現在の施設に残り事業を継続する場合

「年間 20msv の被爆が予想されるものの、この算出方法は屋外 8 時間、屋内 16 時間で計算されているが実際に利用者は外に出ることなく、職員でも屋外労働は年間で数時間のレベルにある。」「一定の条件を整えることで、平成 23 年 5 月 17 日に政府が柔軟な対応で継続運営を認めた。しかし、職員は村外から通勤することとなる。」

こうして、ホームの存続と事業継続が選択されました。しかし、役場の業務も福島市内に移転して、村には日々数人の職員が通勤しているだけ。現在、村内で日中に働いているのは、汚染された田畑や道路の除染作業員だけ。夜は、ひとり老人ホームが「死の村」に取り残されて、寂しく時を過ごしている。しかも、日を追うごと、月を追うごとに入所者も、通勤の職員も、どんどん減っている。

資料によれば、震災時に入所の利用者が112名いたのが、現時点で42名、マイナス70%です。通勤してくる職員も、140名から今は62名でマイナス78%、ホーム存続と事業継続のメリットと考えていた「利用者が安心して生活できる」「将来の復興に繋がる」などは見出せない。むしろ、「入所者の急病など緊急時の対応」、「生活インフラの確保」など、デメリットだけが目立ちます。

目下、作業員が除染中の飯舘村の村民の帰還ですが、2017年の予定だそうです。しかし、まだまだ除染作業は続き、除染の範囲は道路や家屋の周囲20メートルまで、20メートルを1センチでも越えれば、そこは汚染されたままなのです。また、除染の進んだ田畑や庭にも、すでに除染した土砂や草木など、黒いバックに詰め込まれて、そのまま積み上げられて、中間貯蔵施設や最終処分場に行くのを待っています。しかし、宮城、岩手の処分場は決まらず、福島県内も十分な余裕はない。すでに飯舘の村内の山間部に、どんどん放棄されている話も聞きました。しかも、汚染された土砂を、業者が密かに県内、東北各地にも不法投棄した、というニュースも報道されている。まさに「トイレのないマンション建設」が進んでいるのです。これから廃炉の進む福島原発、さらに再稼働される全国各地の原発から出てくる使用済み核燃料はどうするのか？気の遠くなる現実が、目の前の飯舘村で始まっているのです。

今度、飯舘村に出掛けたのは、「老人ホーム」に隣接した空地に、「飯舘電力」のソーラー発電が始まり、その開所式に出席のためでした。しかし、発電の現場は「居住制限区域のため不在」、開所式も福島県庁のビルで行われ、事務所もそこにあるのです。また、大手の東光電気工事が、留守になった村役場を占拠するかのよう「いいたまでいな太陽光発電事業」の看板を大きく出して、「村所有の牧草地に、出力10,000kWの太陽光発電所を建設する。発電した電力は村の復興のために、東北電力(株)に全量売電する」として、作業員が働いています。しかし、この事務所も、「飯舘電力」と同じ福島市内のビルにある。だから発電所の建設が終わり、発電を開始すれば、ほぼ無人で生産されて電力は「東北電力(株)に全量売電する」でしょう。謳い文句の「自然再生エネ」は、どのように地産地消の飯舘村産業の復興に役立つのか不明です。わずかに「老人ホーム」の夜の明かりを灯すだけ、あとは東北電力に売られてしまう。

もう一度、「老人ホーム」に話を戻します。村に残り、事業継続を決めて4年以上経ち、入所の皆さんは頑張ってきました。資料にも、「震災を振り返って」こんな感想が書いてあります。

「 - - - あれから4年、振り返るととても大変なことだった。それでも支え合うなかがいたから、で

きたこと。今でも不思議なくらい笑い笑顔がこぼれる。皆が好きで、一緒に居たいから、想いが同じなら、ひとつになれると思うから - - -」

しかし、ホームの資料では、入所者も、それを支える職員も、もう7割が減ってしまった。少しも戻ってこない。最高齢99歳、最低齢でも78歳、ここで死ぬしかない人だけかも知れません。2年後、村民が避難解除で帰還しても、ホームに戻ってくる老人が居るのか？ホームの玄関の入り口に、東京の渋谷区の区民から送られた針金製の犬の造型が置いてありました。忠犬八子公の造型です。出て行った入所者の帰りを、じっと黙って待っているのか？それとも高齢化の進む東京の老人が、姥捨てさながらに「いいたて福祉会」に入所してくるのを待っているのか？いずれにしても、原発事故で「死の村」となっている飯館の老人ホームに、元気な老人の姿を期待することは無理でしょう

日本創生会議が、6月「東京圏高齢化危機回避戦略」を提起し、高齢者と介護施設の地方分散を訴えました。要約すると、今後「東京圏」(1都3県)では後期高齢者が10年間で178万増加、すでに高齢者が東京都区部から周辺に溢れ、介護需要は全国平均32%増に対し、東京圏は50%も増加する。その結果、介護施設の不足が深刻化、それを高齢者が奪い合う事態となる。東京圏の医療介護体制の増強は、「国民経済的に負担が大きい。」また、地方から東京圏への「人材流入が高まれば、<地方消滅>が加速する。」要するに、東京の危機回避は、高齢者と医療介護体制の地方分散である。

飯館村の「老人ホーム」で、静かに黙って待つ忠犬八子公は、何を考えているでしょう。